デザイナーとして取り組んだ半年の記録

藤岡浩史 / デザイナー

FONTPLUS



株式会社アイスリーデザイン

リードデザイナー

藤岡　浩史

ENFJ。　神奈川県出身、目黒区在住

制作会社 → 事業会社 → フリーランス

AIを活用したデザインワークフローの提案・整備

サービス課題・プロダクト課題に対するディスカバリー支援

FONTPLUS

Selected Work

最近は、こんなことに取り組んでいます

FONTPLUS

最近の取り組み

1　つくるべきものを見極める

2　どうつくるかを仕組み化する

FONTPLUS

最近の取り組み

1　つくるべきものを見極める

2　どうつくるかを仕組み化する

FONTPLUS

Case 01

現場理解から、つくるべきものを見極める

大手通信事業者

FONTPLUS

Case 01：前提と課題

プロダクト自体の差別化が課題

前提	技術起点でAIプロダクトの構想・モックが先行していた
課題	他の生成AIサービスとの差別化と提供価値が曖昧で、進行が難航していた
担当範囲	ヒアリングの設計・実施、課題整理、価値・機能仮説の検討

誰の何を解決するかを明らかにする必要があった。

FONTPLUS

そこで、

やったこと

Case 01：進め方

約40名へのヒアリングから、課題を構造化

1

状況を把握する

企画・開発・営業・運用など、複数部門の担当者に話を聞く。

2

事実を捉える

現場で起きている出来事や困りごとを、一次情報として捉える。

3

クラスタリングする

個々の発言を構造化し、共通する課題を明らかにする。

個別の発言をそのまま機能にせず、共通する課題を捉えた。

FONTPLUS

Case 01：わかったこと

ディスカバリーで見えた3つの課題



社内情報との接続不足

必要な社内データを、人が取り出してAIに渡している。



作業がつながらない

コピーや手入力で、次のツールへ情報を引き継いでいる。



経緯・判断を追えない

チャットや文書を遡って、背景を把握している。

分散した情報を探し、整理する作業が、人の負担になっていた。

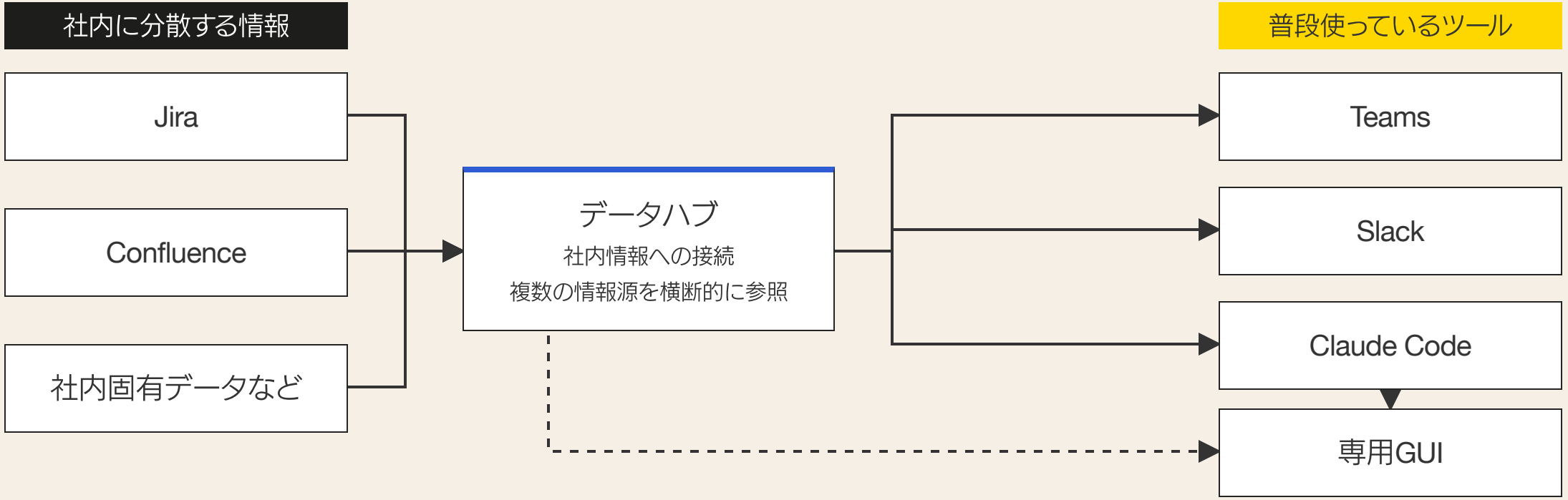
FONTPLUS

探す・整理する負担を減らし、

確認・判断に集中できる体験へ。

Case 01：仮説

分散する社内情報を、日常業務につなぐ



専用GUIに閉じず、普段のツールでも社内情報に届く体験へ。

利用シーン 01

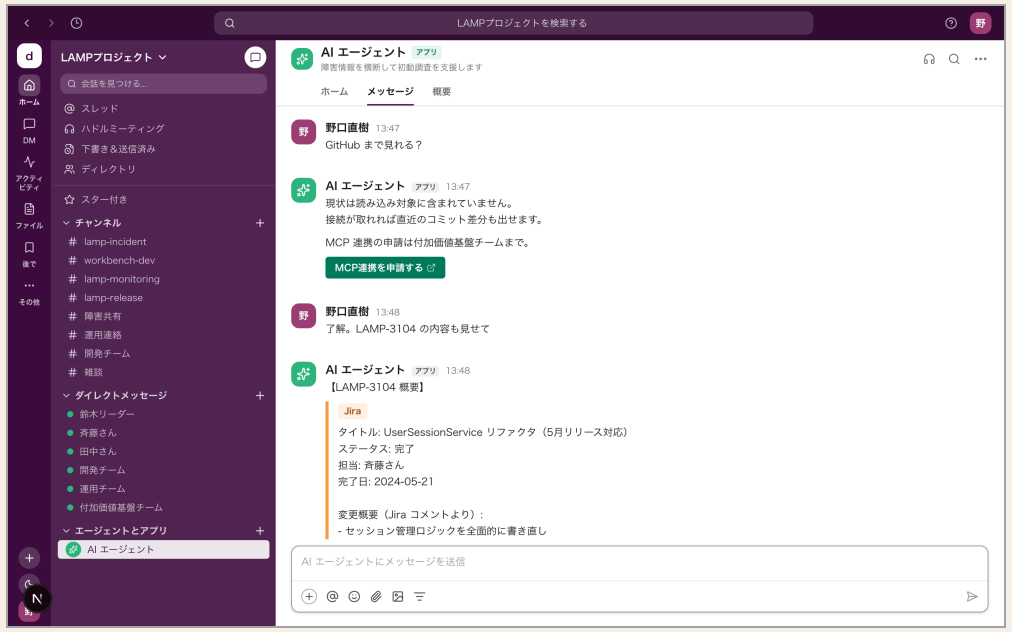
障害対応の情報収集を日常ツールから支援する

現状

障害通知を受けた担当者が、複数のツール（Jira・Confluenceなど）に分散した過去の対応や変更履歴を、一つずつ探して確認している。

解決策

AIが複数のツールを横断で読み取り、過去の対応や変更履歴を出典付きで整理して提示する。



情報を探し回る作業から、根拠をもとに判断できる状態へ。

利用シーン 02

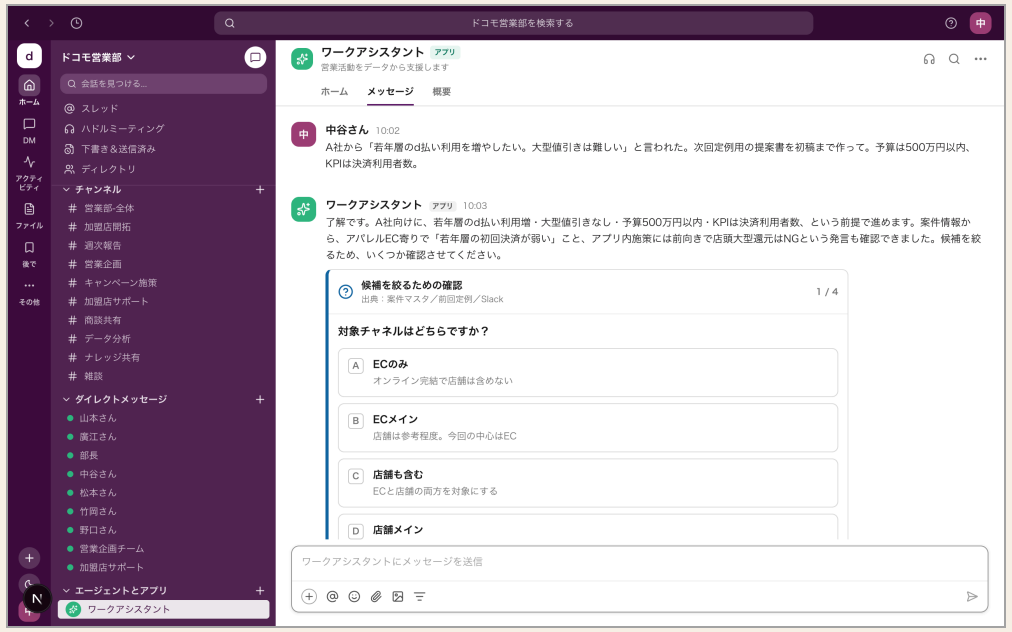
過去の事例・資料から、提案の骨子をつくる

現状

営業が社内ポータルで過去提案を探し、別途集めた最新資料と組み合わせる。顧客向けの提案作成に時間がかかる。

解決策

顧客の課題や条件をもとに、AIが事例や資料からたたき台を作成し、営業が内容を確認して顧客向けに仕上げる。



資料の収集・組み立てから、顧客に合う提案の検討へ。

現場の課題から提供価値を具体化し、

技術検証の準備を進めた

FONTPLUS

デザインは、画面の外にもある。

FONTPLUS

Case 01：参考資料

取り組みの詳細・作成資料

- Discoveryの進め方 ↗
- ヒアリングの一次情報・分析 ↗
- 課題の構造化 ↗
- ユースケース・仮説定義 ↗

情報保護のため、資料は一部の情報を省略して掲載しています。

FONTPLUS

最近の取り組み

1　つくるべきものを見極める

2　どうつくるかを仕組み化する

FONTPLUS

Case 02

AI前提でのデザインプロセスを再設計

大手マーケティングリサーチ企業

FONTPLUS

Case 02：前提

Figmaのデザインと実装に乖離があった

期待	AI活用で効率・品質を高め、デザイナーの力を上流の検討に活かしたい
既存資産	成熟したプロダクトで、デザイン資産が豊富に蓄積されていた
担当範囲	AIを活用した業務プロセスの設計、技術側との合意形成、チーム導入・引き継ぎ

参画前はAI活用の具体策が定まらず、検討が停滞していた。

FONTPLUS

デザイナーがAIを活かし、要件から実装まで、

より深く関われないだろうか。

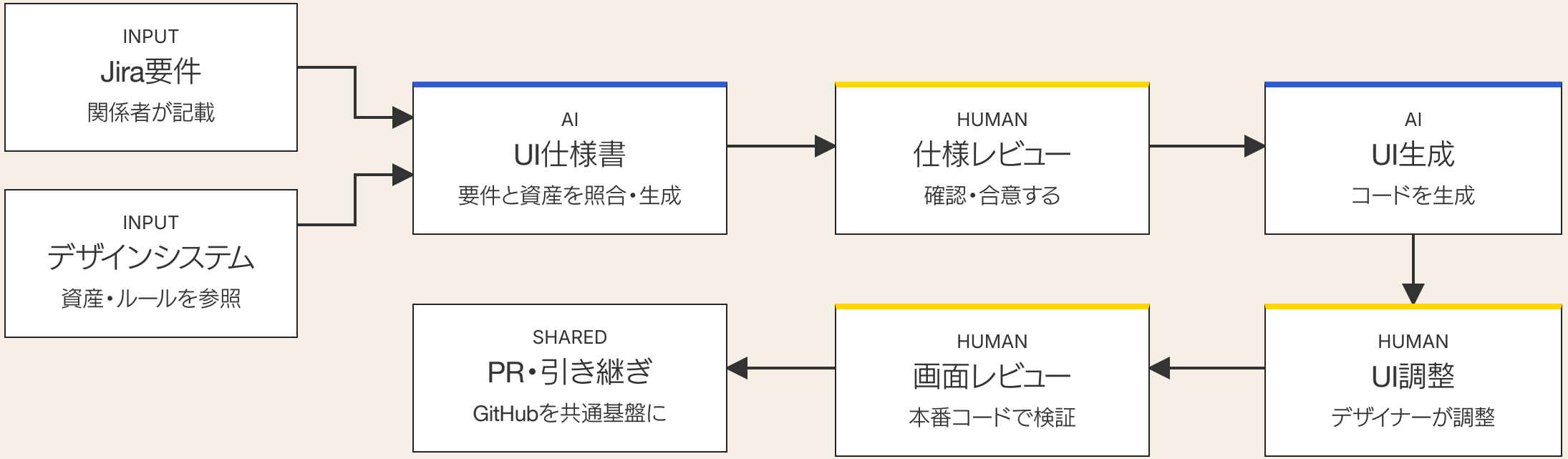
FONTPLUS

本番コードを正本に、

デザイナーもコードでつくる。

Case 02：進め方

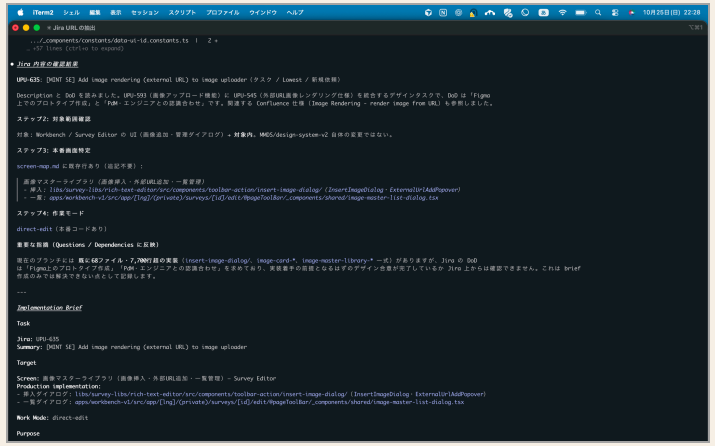
AIと人で、要件からPRまでつなぐ



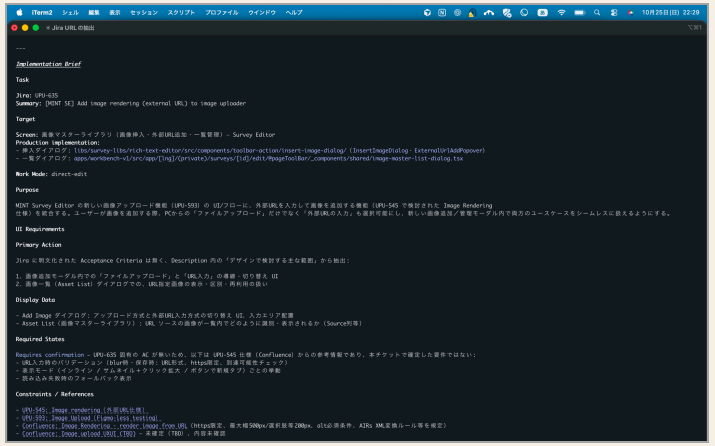
AIを活かし、要件から実装までつなぐワークフローを構築した。

Case 02：進め方

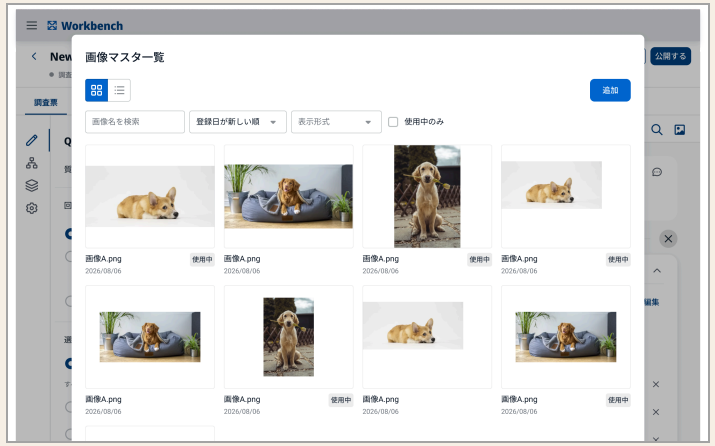
スキルを活用し、画面を生成・検証



1. スキルを発動し、Jiraの内容を把握する。



2. AIがUI仕様書を作る。



3. 生成UIをデザイナーが確認・手直し。

UIルールの確認から生成・レビューまで、スキルを通じて実行する。

FONTPLUS

Case 02：成果

ワークフローを変えて得た3つの成果

1	デザイン精度	本番の状態や制約を踏まえて、デザインできるようになった。
2	検証のしやすさ	実際に近い挙動の画面で、使い勝手を検証できるようになった。
3	認識のそろえやすさ	動作や制約を共有しながら議論し、認識をそろえやすくなった。

実際の体験に即して、デザイン・検証・議論できるようになった。

FONTPLUS

現在も運用しながら、

日々、ワークフローを改善している。

FONTPLUS

Summary

この半年で求められたこと

何をつくらないかと、

「何をつくるか」を見極めること。

FONTPLUS

要件から実装までをつなぐために、

「どうつくるか」を仕組みにすること。

FONTPLUS

求められたのは、画面を描くだけでなく、

つくるものと、つくり方を整えること。

FONTPLUS

Thank you

デザインを通じて、サービスの理想を形にしていきたい。